

市場価値論考

東 井 正 美

I 問題の所在

市場価値の諸規定については『資本論』第3巻第2篇第10章「競争による一般的利潤率の均等化。市場価格と市場価値。超過利潤」¹⁾において述べられている。この章は、マルクスの草稿が未完成であったせいから十分整理されたものとはいわれがたく、きわめて難解なものとして知られている。市場価値の「決定法則」についても明らかでない点が多く、難解である。これらの点が明確に解明されているとはいいたくないのである。

周知のとおり、マルクスの市場価値の決定法則にかんして論議の対象となっているものをあげれば次のとおりである。まず第1に、マルクスの市場価値の決定法則には、市場価値が諸個別的価値の算術加重平均として決定されるという「加重平均規定」と、大量商品の価値によって決定されるという「支配的大

1) Karl Marx, *Das Kapital*, III, Marx-Engels-Lenin-Institut, Moskau, S. 197—225. Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 25, *Das Kapital*. Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1962, S. 182—209.

長谷部文雄訳『資本論』第3部上（河出書房新社、1965年）150—71ページ。向坂逸郎訳『資本論』第3巻第1部（岩波書店、1967年）213—45ページ。岡崎次郎訳『資本論』第3巻第1分冊、『マルクス—エンゲルス全集』第25巻第1分冊（大月書店、1966年）218—50ページ。訳文は原則として岡崎訳本にしたがうが、そのさい長谷部訳本も、向坂訳本も、参看した。

量規定」とがあり、この両規定にかかわる問題があげられる。すなわち、「支配的大量規定を、加重平均規定と背馳しない形で」論理的に生かそうとすれば、どのような理解を示せばよいのか²⁾、またはその両規定のうちいずれが「正当な規定」と見なされるべきか³⁾、あるいはその両規定のいずれが「一般規定」であるのか⁴⁾、等々が議論の対象となっている。

第二に、マルクスの市場価値の決定には需給と関連する市場価値の規定があり、これにかかわる問題をあげることができる。需給と関連する市場価値規定にかんするマルクスの叙述が、「不明瞭な個所」と呼ばれ、重要な争点の一つをなしてきた⁵⁾。

-
- 2) 本間要一郎教授はこの点についてこう述べられている。「支配大量規定を、加重平均規定と背馳しない形で理論的に生かそうとするばあいには、それは『げんみつな意味の平均的価値の自己疎外』であるとか、加重平均による『抽象的规定をより具体的、感覚的にとらえ直した』ものであるとか、という形で、『げんみつな意味の平均的市場価値』が『近似的に』自らを表現する形態だとみなすことになるのである。」(本間要一郎『競争と独占』[新評論, 1974年] 76ページ)。
- 3) 大内力教授は、両規定を分析して「市場価値の正当な規定」についてこう述べられている。「マルクスの市場価値についての規定のうち、はじめの引用についていえば、後半の部分〔市場価値は、「他面ではその部面の平均的諸条件のもとで生産されてその部面の生産物の大量をなしている諸商品の個別的価値と見られるべきであろう。」という部分、つまり支配的大量規定のこと——東井〕こそ市場価値の正当な規定だというべきであろう。これにたいして、平均価値によって市場価値が決定されるという前半の規定〔市場価値は、「一面では一つの部面で生産される諸商品の平均価値と見られるべきであろう」という規定のこと——東井〕は、われわれにはとうていいうけいれがたいものである。このような平均価値は、算術計算としてはいちおう成りたちうるかもしれない。しかし市場における競争をつうじて、なにゆえそのような平均価値が市場価値を規制するののかということ、まったくわからないし、このように算術的に計算された平均価値と、商品の再生産のために必要な労働量とが、どういう関係にあるのかもわからない。つまりそれは価値法則は、資本主義的再生産全体を貫いてみずからを実現してゆく法則性であるという理解とはまったく無縁な、機械的な理解のしかたなのである。」(大内力『地代と土地所有』[東京大学出版会, 1958年] 21—2ページ)。大内教授のこの見解は基本的に正しいものと思われる。この点は後述することにしよう。

以上がマルクスの市場価値論についての問題点であり、論議的であるのだが、これを解明しようとする種々の論議はそれぞれ部分的にはある程度の成果をあげつつも、決定的に決着をつけるにいたらずに、こんにちにおよんでいる。ところで、桜井毅教授は、マルクスの市場価値の諸規定を、「需給の量の考察を捨象した」市場価値の「抽象的な規定」を示す「第一の規定」と、需給に関連する市場価値規定を示す「第二の規定」とに区分して、市場価値を解明

- 4) 城座和夫教授は、「市場価値の平均規定（もちろん価値次元における市場価値の規定であることはいうまでもない）は、じつは、市場価値の一般的規定とはなりえず、特殊規定たりうるにとどまるほかないことは明らかであろう。」と述べている（城座和夫『労働価値論の基本問題』ミネルヴァ書房、1971年、253ページ）。なお、城座和夫教授がかかる解釈をしていることは、本間要一郎教授によっても指摘されている。「城座和夫氏も、マルクスは『前の規定（平均規定）を厳密な規定とし、後の規定（大量規定）を近似的な便宜的な規定としている』と解釈している（城座、同書、247ページ）。もっとも、氏自身は『平均規定は、…市場価値の一般的規定とはなりえず、特殊規定たりうるにとどまるほかない』（同書、253ページ）と考え、独自の大量規定原理を提示している。」（本間要一郎、前掲書、84ページ）。
- 5) 大島雄一教授は、次のように言われている。「市場価値の一般的規定は平均価値規定である。／ところが、この同じ市場価値論の叙述のなかでマルクスは、右の平均価値規定とあきらかにことなり、しかも一見したところ需給関係によって市場価値がきまるかにおもわせる規定をあたえている。これは『曖昧な個所』とか『不明瞭な個所』とかよばれ、重要な論争点の一つをなしてきた。」（『資本論講座』第45冊、青木書店、1964年、85ページ。）後に、この論文は、大島雄一『価格と資本の論理』（未来社、1965年、370ページ）に収載されている。

この「不明瞭な個所」にかんしておこなわれてきた論議を、井上周八教授は、「技術説」、「消費説」の別にとらわれず、次のように大別された。

「(1)需給の変動を契機にある支配的な生産諸条件が他の支配的なそれへと移行する際に生ずる『市場価値の変化過程の問題』とする解釈。／(2)マルクス経済理論の論理的一貫性を厳密に保持するため、この『問題の個所』における市場価値 Marktwert をマルクスの誤記として市場価格 Marktpreis と訂正しなければならないとする解釈。／(3)『平均価値』としての『市場価値』は、通常の規定であるが、この『問題の個所』における場合は、市場価値に関する『特殊規定』にほかならないとする解釈。」（井上周八『『差額地代』と『価値』』(3)一白杉庄一郎教授の所説に関連して一、『立教経済学研究』第22巻第4号、1969年、14—6ページ）。

しようとしたのである⁶⁾。このような区分に着眼されたことは良い。そしてその区分は、市場価値法則を解明するための決め手になるように思われる。マルクスの市場価値決定にかんする叙述をこの区分にしたがって正しく整理できれば、マルクスの市場価値論の不明な点を解明できるように思われる。これがとりもなおさず本稿の課題である。本稿では、マルクスの市場価値にかんする叙述を、「第一の規定」と「第二の規定」に私なりに整理をおこなって、「第一の規定」と「第二の規定」の意義を明らかにして、この区分を通うじて加重平均規定か支配的大量規定かという問題を解明し、あわせて「不明瞭な個所」も解明しようとするものである。

松石勝彦教授は次のように述べられている。「需給不一致のとき、市場価格は市場価値から背離するという現象の確認だけでは明らかに不十分である。需給不一致のとき、市場価値から背離するその市場価格とは一体何であるか、その正体、内実は何か、労働価値説といかなる関連を有するのか、その価値的根拠はどこに求めるべきか、あるいはまた市場価格の形成メカニズム、市場価値から市場価格の背離のメカニズムは何か。／『資本論』第3巻第10章のいわゆる『不明瞭な個所』は、まさに需給不一致という特殊な場合の市場価値をどう規定するかを問題にしているのであって、それを需給一致のときの市場価値の

6) 桜井毅教授はこう述べられている。「第二の規定は注目に値する。たんに優良条件や、劣等条件の両極端で規定されるとか、あるいは平均条件で規定されるとかいうことなく、市場価値としての本来の規定をここに見出しうると考えられるからである。すなわち、需給の変動を通して再生産構造を反映する生産条件による市場価値の確定の機構への洞察がみられるのである。マルクスは、市場価値の確定についての『抽象的な叙述』においては、生産分量は一定におき、その変化自体は考慮に入れなかった。したがって、マルクス自身述べているように、それは供給量のなかに占める、異なる生産諸条件のもとで生産される商品量の相互間の比率によって決定されるにすぎないのであった。あるいは、市場価格と切離され市場の意味を消失した、たんなる価値としての市場価値の規定にすぎないものであった。しかし、くりかえしていうように、市場価値は、じつは、市場価格の運動機構を通じて確定される以外に規定されえないのである。」(桜井毅『生産価格の理論』東京大学出版会、1968年、238ページ。)と。

7) 松石勝彦『独占資本主義の価格理論』(新評論、1972年)108—9ページ。

一般的規定の修正，応用として何とか説こうとしているのである。」⁷⁾

この松石教授の問題提起は正当なものと思われる。本稿では，松石教授によって提起された問題を私なりに受けとめてたえず念頭に入れながら，市場価値の法則を解明しようとするものである。

II 市場価値規定にかんする「第一の規定」と「第二の規定」

あらかじめ，市場価値の概念について見ておこう。マルクスは、『剰余価値学説史』で，市場価値について次のように書いている。

「一般的結論は次のとおりである。この部類の諸生産物がもつ一般的価値は，これと各個の商品の個別的価値との比がどうであろうとも，すべての商品について同じである。この共通な価値こそ，これらの商品の市場価値であり，それらの商品が市場に出てくる時の価値である。この市場価値の貨幣での表現が市場価格であって，価値の貨幣での表現が一般に価格であると同様である。／現実の市場価格が，大きさの点で，量的に，ある与えられた瞬間にこの市場価値に一致するにせよ一致しないにせよ，いずれにしても現実の市場価格は市場価値と共通な質的規定をもつ。その規定というものは，市場にある同じ生産部面のすべての商品は（もちろん質を同じものと前提すれば）同じ価格をもつということ，すなわち，事実上この部面の諸商品の一般的価値を表現するということである。」¹⁾（傍点は原文のまま）。

みられるように，市場価値とは，同一生産部面内部で相異なる生産諸条件のもとで生産され，個別的価値を異にする同種の諸商品が同一市場において現われるときにもたなければならない「一般的な価値」，または「共通的な価値」のことである。つまり，市場価値は，市場での相異なる個別的価値の「共通的

1) Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 26, Zweiter Teil, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1967, S. 202.

カール・マルクス『剰余価値学説史』第2分冊，岡崎次郎訳『マルクス＝エンゲルス全集』第26巻第2分冊（大月書店，1970年1月）265ページ。

な価値」、または「一般的な価値」のことである。

さて、桜井毅教授は、「第一の規定」として、マルクスの次の叙述をあげられている。

(1)「市場価値は、一面では、ある部面で生産される諸商品の平均価値と見なされるべきであり、他面では、その部面の平均的諸条件のもとで生産されてその部面の生産物の大量をなしている諸商品の個別的価値と見なされるべきであろう。」(2)「最悪の条件や最良の条件のもとで生産される商品が市場価値を規制するということは、ただ異常な組み合わせのもとでのみ見られることであって、市場価値はそれ自身市場価格の変動の中心なのである——といっても市場価格は同じ種類の諸商品では同じなのである。」(2)と(1)の記号は東井。

これについて、桜井教授はこう述べられている。「これは『普通の供給』が『普通の需要』を充たしている場合である。」²⁾と。後に明らかにするように、「普通の供給」が「普通の需要」をみたすという表現はおかしい。正確に表現すれば、「普通の供給」と「普通の需要」とが対応する需給の「普通の」組み合わせというべきであった。(1)の叙述は、需給の「普通の」組み合わせのもとで成立した中位的・平均的な市場価値の規定にかんするものである。需給の「普通の」組み合わせからみた市場価値とするならば、(1)の市場価値の規定は、「第二の規定」ともいえるべきものである。単に(1)が市場価値の「抽象的な」規定にとどまるとするならば、(1)は「第一の規定」として区分されうるが、しかし(1)は桜井教授が指摘されているように、「普通の供給」＝「普通の需要」の場合において成立する市場価値であると考えのなら、(1)は「第二の規定」をふまえたうえでの市場価値の総括的な規定として理解されるべきであろう。「第一の規定」として分類されるべき市場価値にかんするマルクスの叙述は、後段で掲げることしよう。

また、桜井毅教授は、「第一の規定で前提されていることは、商品の特定量

2) 桜井毅，前掲書，233ページ。

の供給に対して必ず特定量の需要がみあっているということであり、換言すれば需給の量の考察をさしあたり捨象するということである。』³⁾と述べられているが、この考え方は、加重平均規定としての市場価値にかんするかぎりでは基本的に正しいと思われる。さしあたり、「需要」または「社会的欲望の程度すなわち量」を捨象した市場価値の「抽象的な」確定を「第一の規定」としてとらえることにしよう。さらに、桜井教授は、こう言われている。「仔細にみれば、需給の変動を通しての市場価値の確定は、マルクスのいわゆる『抽象的確定』と明らかに区別されているとみることができるとと思われる。したがって、この区別を認めず、マルクスの第一の確定のみに市場価値規定をみて、これを市場の意味を除いたたんなる価値論に解消し、第二の規定による市場価値決定を、たんなる市場価値論とみなして、これらをすべてマルクスの誤記としてしりぞけ、市場価値を市場価格と書きあらためようとする山本二三丸教授の説（山本二三丸「市場価格と市場価値」(4) [『立教経済学研究』第8巻第1号]）には、その混同のもっとも極端なものとして賛成することができない。』⁴⁾と。この桜井教授の見解は至当であろう。したがって、需要を捨象した「抽象的な」市場価値規定の「第一の規定」と需給と関連する「第二の規定」との区別は正当なものであり、「第二の規定」の考察を重視されるのも当然のことである。

桜井教授は、マルクスの市場価値の支配的大量規定を加重平均規定の「近似的接近の意味としてのみ、とらえられ」て、平均規定のみを「第一の規定」としてとらえられている⁵⁾。しかし、市場価値の支配的大量規定は桜井教授の「需給の変動を通しての市場価値の確定」と重要なかわりあいをもつのであって、

3) 同書、234ページ。

4) 同書、240ページ。

5) 桜井教授はこう述べられている。「平均説と支配的大量説との共存は、マルクス自身の『厳密な』いかえを信じるならば、ここでは、さしあたり、後者は前者の近似的接近の意味としてのみ、とらえられるべきであろう。結局、これは、あきらかにマルクスの市場価値決定についての、第一の規定ということが出来る。」(同書、236ページ)。

支配的大量規定を加重平均規定の「近似的接近の意味としてのみとらえる」ことは、たとえそうだとしても前者を後者に解消してしまう危険性がある。「第一の規定」は需要を捨象した「抽象的な」市場価値規定であって、これには支配的大量規定と加重平均規定とがあることを明確に識別しておくべきである。

桜井教授が示唆されているように、「第一の規定」とは、需要または社会的欲望の量についての考察を捨象した市場価値の確定にかんするマルクスの「抽象的な」叙述が示す市場価値の「抽象的な」確定のこととしてのみとらえることにしよう。しかし、桜井教授のように、「第一の規定」を単に平均規定に限定してはとらえない。したがって、「第一の規定」には加重平均規定と支配的大量規定とがある。「第一の規定」に対比させた「第二の規定」として、桜井教授は、マルクスの次の叙述をあげられている。「需要が強くて、最悪の条件のもとで生産される商品の価値によって価格が規制されても需要が収縮しないような場合には、このような商品が市場価値を規定する。このようなことが可能なのは、ただ、需要が普通の需要を越える場合か、または供給が普通の供給よりも減る場合だけである。」これは要するに、需給と関連する市場価値の規定であり、これを「第二の規定」としてとらえこることにしよう。

さて、先に桜井教授が「第一の規定」としてかけられた、マルクスの市場価値の一般的な叙述(2)にたちもどることにしよう。

桜井教授が、「第一の規定」に、「最悪の条件や最良の条件のもとで」からはじまり「といっても市場価格は同じ種類の商品では同じなのである。」で終わる、「異常な組み合わせ」のもとで市場価値の規定を含めているのは間違いであろう。というのは、「異常な組み合わせ」とは、需給にかかわる概念であるからである。「一定の生産部門の商品分量がその市場価値どおりに、それよりも高くも安くもなく売れるように需要と供給との割合がなっている場合には需要と供給とは一致する」が、この場合の需給の割合が、需給の「普通の」組み合わせであろう。これとは反対に、諸商品の市場価値イコール平均価値どおりの販売を不可能とさせるようになっている需要と供給の割合が、「異常な組み

合わせ」なのである⁶⁾。したがって、「異常な組み合わせ」のもとでの市場価値規制は、需給と関連する市場価値規定を示す「第二の規定」に含ましめるべきであろう。需要と供給の一致が意味することについては後述する。

ところで、山本二三丸教授は、「同一商品を生産しながらそれぞれ生産諸条件を異にし、したがってそれぞれ個別的価値を異にする a, b および c が、生産総量の上でそれぞれどれだけの割合を占めるかということが、『組み合わせ』の問題であり、この『組み合わせ』のいかんによって市場価値が決定されるのである。」と述べ、「異常な組み合わせ」とは、『劣悪な条件』のもとで生産される商品大量が相対的により大きい第二の『組み合わせ』と、『優良な条件』のもとで生産される商品大量が相対的により大きい第三の『組み合わせ』をさしていったものにほかならない。』⁷⁾と述べられた。このような、「組み合わせ」にかんする山本教授の解釈は、いまや通説にまで高められた。しかし、山本教授の言われる「異常な組み合わせ」は、マルクスの言う「異常な組み合わせ」とは異なるものである。というのは、マルクスの「異常な組み合わせ」は、需給の「異常な組み合わせ」と理解しなければならないからである。しかしながら、「抽象的な」市場価値の確定を示す「第一の規定」のうち平均規定を理解

6) 「異常な組み合わせ」を需給との関連でとりあげられたのは、長谷部文雄教授をもって嚆矢とする。教授はこう述べられている。「ここでの問題は『最悪の条件下……で生産された商品が市場価値……を規制する』ところの『異常な組み合わせ』すなわち『需要が普通の程度を凌駕する場合』の説明である。」(傍点は東井)と。(長谷部文雄訳『資本論第3部第2分冊』9, 日本評論社版, 1969年, 74ページ。)山本二三丸教授が指摘されているように、「訳注のこの部分は、日本評論社版訳本の上に掲げられていて、青木文庫版訳本でははぶかれている。」(山本二三丸『価値論研究』青木書店, 1962年, 138ページ)。なお、それ以後、河出書房新社版でも、はぶかれているが、これは残念なことである。

その後、吉村勲教授は、「異常な組み合わせ」を需給不一致であるとの見解を披瀝された。教授は言う、「この『異常な組み合わせ』とは、価値の場合に前提され当然であった供給と需要との終局的な一致の崩壊である。」(吉村勲『現代の賃金論』, 日本評論新社, 1961年, 29ページ)と。

7) 山本二三丸『価値論研究』(青木書店, 1962年) 135—6ページ。

するうえで、山本二三丸教授が明らかにされた「個別的価値を異にする a 、 b 、 c が、生産総量の上でどれだけの割合を占めるかという…組み合わせ」は便宜的な概念規定である。それはそれなりに評価されてしかるべきである。

しかし、このような理解では、「相異なる諸条件のもとで生産される諸分量間の単なる比率からすれば別の結果が生ずるはずにもかかわらず、両極端の一方が市場価値を規定する」ということが解明できなくなるであろう。マルクスの「異常な組み合わせ」を、山本教授の言われる上・中・下の商品分量の「異常な組み合わせ」と理解するかぎりでは、マルクスの市場価値論の首尾一貫した理解はできないものと思われる。

それはともかく、桜井毅教授は、おそらく「異常な組み合わせ」を、通説にしたがって、生産条件の異常な組み合わせ、すなわち「下位相対的大量」と「上位相対的大量」として理解され、「異常な組み合わせ」のもとでおこなわれる市場価値規定の叙述を「第一の規定」として分類されたものと思われる。しかし、この「異常な組み合わせ」のもとでの市場価値決定にかんする叙述は、それにすぐ引きつづいてくる次の叙述と正・反の対をなす。

(3)「平均価値での、すなわち両極の間にある大量の商品の中位価値での、商品の供給が普通の需要をみたす場合には、市場価値よりも低い個別的価値をもつ商品は特別剰余価値または超過利潤を実現するが、市場価値よりも高い個別的価値をもつ商品はそれに含まれている剰余価値の一部分を実現することができない。」

この(3)と(2)とは、市場での需給の「組み合わせ」にかかわる市場価値にかんする叙述である。すなわち、(3)は需給の「普通の」組み合わせのもとでの市場価値にかんする叙述であり、(2)は需給の「異常な組み合わせ」のもとでの市場価値にかんする叙述である。(3)と(2)とは、いずれも需給の組み合わせにかかわる叙述なので「対」をなすものと思われる。したがって、(2)と(3)は、需給に関する「第二の規定」として分類されるべきものである。

次に、(1)の市場価値についての叙述を見てみよう。市場価値は、その叙述の

前半では諸商品の個別的価値の加重平均としてとらえられており——加重平均規定——，その叙述の後半では大量商品の個別的価値としてとらえられている＝支配的大量規定。したがって，(1)の市場価値にかんする叙述には，「市場価値にかんする二つの異なる規定」または「形成原理の相違」が見られるのである。このことはつとに察知されていたのである⁸⁾。

(1)での市場価値規定は，加重平均規定と支配的大量規定とが統一されたものとして，または止揚されたものとして理解されるべきものだが，もともと「市場価値にかんする二つの異なる規定」，すなわち加重平均規定と支配的大量規定とは相違するものであるから，中位大量で上・下不均衡となる場合には，大量商品の個別的価値と平均価値とは相違し，加重平均規定と支配的大量規定と

8) この市場価値にかんする前半の規定と後半の規定とでは「形成の原理」がちがっていることはデ・イ・ローゼンベルグが『資本論注解』で次のように指摘している。

「もし市場価値を『ある部面で生産される商品の平均的価値』とみなすと，それは，個別的価値の総和を商品総量に分割することによって形成される。だがもし市場価値を『その部面の平均的条件のもとで生産される商品の個別的価値』とみなすと，その形成の原理はもはやちがってくる。平均的条件のもとで支出される労働が各商品の価値を，すなわちまた，別の条件のもとで生産された商品の価値をも，規定するのである。」と。(副島種典・宇高基輔訳『資本論注解』第4分冊，青木書店，1962年，123—4ページ)。

日本の学界においてこの疑問を最初にだされたのはおそらく鈴木鴻一郎教授であるであろう。教授は言う，「ここでの問題は右の章句における『平均価値』の『平均』と『平均的諸条件』の『平均』の意味がそれぞれ異なるものではないかということである。すなわち前者の場合には算術平均の意味に用いられていると考えられるに反し，後者の場合には算術平均の意味の外になお支配的平均の意味をも容れる余地を残しているのではないかと考えられるのである……そうなればマルクスは同じ『市場価値』という概念を二つの異った意味に用いているということにならざるを得ない。」(鈴木鴻一郎『地代論論争』劉草書房，1952年，22—2ページ)。

大内力教授も，前半の規定と後半の規定とのくいちがいについて指摘された。その要点は「中位大量，上・下不均衡」の場合には，諸商品の個別的価値の平均としての市場価値—前半の規定—と，その部面の生産物の大量をなす諸商品の個別的価値—後半の規定—とはくいちがうということである。(大内力『地代と土地所有』東京大学出版会，1958年，5—6ページ)。

は決別してしまうのである。「下位相対的大量」と「上位相対的大量」の場合には、言うまでもなく、大量商品の個別的価値は平均価値から背離し、支配的大量規定と加重平均規定とは「市場価値にかんする二つの異なる規定」として現われるのである。

さて、さしあたり一定の商品量にたいする「社会的欲望の程度すなわちその量」、または「市場で代表される欲望・需要」（傍点は原文のまま）の考察を捨象したという意味での市場価値の「抽象的な」確定を、「第一の規定」として考え、これにかんするマルクスの叙述を私なりに整理して見よう。以下のとおりである。

〔I〕「第一の規定」

マルクスは、「全商品量、つまりさしあたりは一つの生産部門のそれを一つの商品とみて、多数の同種の諸商品の価格の総計を一つの価格に合計されたものとみれば、事柄がもっと容易に叙述される。そのばあいには、個々の商品について語られたことが、今や文字どおりに、市場にある一定の生産部門の商品量にあてはまる。商品の個別的価値はその社会的価値に一致するということが、いまや、総商品分量はその生産に必要な社会的労働を含むということに、そしてこの商品量の価値はその市場価値に等しいということまで、現実化されており、言い換えれば、一步すすんで規定されている。」（傍点は原文のまま）と述べてから、市場価値の「抽象的な」確定に入る。

(4)「これらの商品の大量がほぼ同等な標準的な社会的条件のもとで生産されていて、この価値は同時に、この商品量を構成する個々の商品の個別的価値でもある、と仮定しよう。いまもし、比較的小さい一部分はこの条件よりも悪い条件で生産され、他の一部分はそれよりも良い条件で生産されており、したがって、一方の部分の個別的価値はこの商品の大きな部分の中位的価値よりも大きく、他方の一部分の個別的価値はこの中位的価値よりも小さいが、しかしこの両極は平均されて、両極に属する商品の平均価値は中位の大量に属する商品の価値に等しいとすれば、その場合には、市場価値は、中位の条件のもとで生

産された商品の価値によって規定される。この商品量全体の価値は、中位の条件のもとで生産されたものも、それ以下または以上の条件のもとで生産された諸商品も含めての、すべての個々の商品の価値を合計した現実の総額に等しい。この場合には、この商品量の市場価値または社会的価値——この商品量に必然的に含まれている労働時間——は、中位の大量の価値によって規定されているのである。」（傍点は東井）。

(5)「これに反し、市場に出される問題の商品の総分量はやはり同じであるが、しかし、悪い方の条件のもとで生産される商品の価値が良い方の条件のもとで生産される商品の価値と相殺されないために、悪い方の条件のもとで生産される商品量部分が中位の商品量に比べても他方の極に比べても相対的にかなりの大きさを占めると仮定すれば、その場合には悪い方の条件のもとで生産される商品大量が、市場価値または社会的価値を規制する。」（傍点は東井）。

(6)「最後に、中位よりも良い条件のもとで生産される商品分量が、中位よりも悪い条件のもとで生産される商品分量を著しく超過し、また、中位の事情のもとで生産される商品量に比べてもかなり大きいと仮定すれば、その場合には最良の条件のもとで生産される部分が市場価値を規制する。市場が供給過剰の場合には、いつでも、最良の条件のもとで生産される部分が市場価格を規制するのであるが、このような場合はここでは問題にしない。われわれがここで取り扱うのは、市場価値とは別ものであるかぎりでの市場価格ではなく、市場価値そのもののいろいろな規定である。」（傍点は東井）。

以上の三つの市場価値の確定を表示すれば、表 I 「市場価値と支配的大量規定」となるであろう。

なお、第一の場合を「中位大量，上・下均衡」、第二の場合を「下位相対的大量」、第三の場合を「上位相対的大量」とよぶことにしよう⁹⁾。

以上の三つの場合における市場価値の規定に共通していえることは、大量商

9) 本間要一郎『競争と独占』（新評論，1974年1月）137ページ。

表I 市場價值と支配的大量規定

条件別	商品量	価値総額	個別的価値	市場価値	市場価値額	市場価格	市場価格計	別剩余価値
第一の場合 (中位大量、上下均衡)	最悪(下位)	10	30	3	2	2	20	- 10
	中位	80	160	2	2	2	160	0
	最良(上位)	10	10	1	2	2	20	+ 10
平均	100	200	-	-	200	-	200	± 0
第二の場合 (上位相対的大量)	最悪(下位)	70	210	3	3	3	210	0
	中位	20	40	2	3	3	60	+ 20
	最良(上位)	10	10	1	3	3	30	+ 20
平均	100	260	-	-	300	-	300	+ 40
第三の場合 (上位相対的大量)	最悪(下位)	10	30	3	1	1	10	- 20
	中位	20	40	2	1	1	20	- 20
	最良(上位)	70	70	1	1	1	70	0
平均	100	140	-	-	100	-	100	- 40
	1	12%	-	-	1	-	1	-

品の価値が市場価値を規定するということである¹⁰⁾。大量商品の価値によって規定された市場価値が平均価値と合致するのは、「中位大量，上・下均衡」の第一の場合においてのみ見られることである。「下位相対的大量」の第二の場合と、「上位相対的大量」の第三の場合には，市場価値は，平均価値にそれぞれ近似的であっても，平均価値とは一致していないのである。したがって，市場価値には，平均価値に一致するものと，近似ではあるが一致しないものと二様の市場価値があるものと理解されなければならない。それゆえに，第一の場合においてのみ，諸商品は，市場価値＝平均価値どおりに販売されるのであって，第二，第三の場合には，いずれも諸商品は，平均価値に近似な市場価値で売られるのである。この二様の市場価値の「内容上の相違をマルクス価値論の展開としてどう説明されるのか。」¹¹⁾ということが，重要な課題になる。それはしばらくおき，さしあたりここでは，マルクスは市場価値の決定につい

10) このような市場価値の確定について大内力教授は次のように言われている。「ここでは三つのばあいあげられているが，それをつうじて読みとれることは，ここではマルクスは，ともかく市場において大量をしめる商品の個別的価値が，市場価値を規定すると考えているということである。」（大内力，前掲書，7ページ。）

11) かつて，私は，マルクスの市場価値には二様の市場価値——市場価値＝平均価値と市場価値≠平均価値——のあることを述べたことにたいして，井上周八教授から次のように批判された。「市場価値を平均価値としての市場価値と，平均価値でない市場価値……とに区別しているが，この両者の区別によって生ずる市場価値の内容上の相違をマルクス価値論の展開としてどう説明されるのか。……平均価値と市場価値は『偏倚する』といっただけでは，説明として不十分ではなからうか。〔いずれの〕市場価値も，……市場価値である点に変わりなく，したがって価値である以上，基本的には社会的＝市場価値であるはずで，第一規定の市場価値はイコール社会的価値，第二規定の市場価値はユニコール社会的価値とはいえないはずであり，もしそのようにいえるとするなら，その理由の説明がなくてはならない。」（〔 〕内は東井）。（井上周八，『『差額地代』と『価値』』（5）『立教経済学研究』第23巻第2号（1969年）83—4ページ。）

市場価値には平均価値に等しい市場価値とそうでない市場価値の二様の市場価値があることは，私の独断ではなくして，マルクスの提示したことである。この二様の市場価値にたいする井上周八教授の批判は，まさしく，マルクスの市場価値論の理解のもうえて重要な課題といわざるをえない。この点は後述。

で大量商品の価値による規定を提示することからはじめていることに注意を払わなければならないということを指摘しておけばよい。

マルクスは、「じっさい、非常に厳密に言えば（といっても、もちろん現実にはただ近似的に、非常にさまざまに変容して現れるだけであるが）」と述べてから、加重平均規定を与えているのである。以下のとおりである。その叙述のしかたをみれば、まず支配的大量規定を与え、次に「厳密に言えば」での加重平均規定を与え——ゴシック体の叙述——、最後に、需給と関連する市場価値の規定を与えている——傍点を付した叙述。

(7)「第一の場合には、中位の価値によって規制される全商品分量の市場価値は、それぞれの個別的価値の総計に等しい。といっても、両極で生産される諸商品にとっては、この価値はそれらに押しつけられた平均価値として現われるのであるが。その場合、最悪の極で生産する人々は自分の商品を個別的価値よりも安く売らなければならないが、最良の極で生産する人々は個別的価値よりも高く売るのである。

(8)「第二の場合には、両方の極で生産される個別的価値量が相殺されないで、悪い方の条件のもとで生産されるものが決定する。厳密に言えば、各個の商品の、または総商品量の各可除部分の、平均価格または市場価値は、いまや、相異なる条件のもとで生産される諸商品の価値の加算によって出てくる商品量の総価値と、この総価値から個々の商品に割り当たる可除部分とによって規定されているであろう。このようにして得られる市場価値は、有利な極に属する商品の個別的価値よりも高いだけでなく、中位の層に属する商品の個別的価値に比べてもそれよりも高いであろう。しかし、それは、不利な極で生産される商品の個別的価値に比べれば、やはりそれよりも低いであろう。市場価値がどの程度までこれに近づくか、または結局これと一致するかは、まったく、不利な極で生産される商品分量がその部面でどれだけの範囲を占めるかによって定まる。需要のほう^がほんのわずかでも大きければ、不利な条件のもとで生産される商品の個別的価値が市場価格を規制する。

(9)「最後に、第三の場合のように、有利な極で生産される商品分量が、単に他方の極のものとは比べてだけでなく中位の条件のものとは比べても、より大きい範囲を占めているならば、市場価値は中位の価値よりも低くなる。両極と中位との価値総額の加算によって計算された平均価値は、この場合には中位の価値よりも低い。そして、それは、有利な極が占める範囲の相対的な大きさによって、中位の価値に近くもなれば遠くもなる。供給に比べて需要が弱ければ、有利な条件で生産される部分が、その大きさはどれだけであろうと、その価格その個別的価値まで引き下げることによってのさばってくる。市場価値は、供給が需要を甚だしく超過する場合を除けば、最良の条件のもとで生産される商品のこの個別的価値とは一致しない。」(傍点とゴシックはともに東井)。

この「厳密に言えば」での市場価値にかんする加重平均規定を表示すれば、表Ⅱ市場価値と加重平均的規定のようになるであろう。

みられるように、マルクスは、三つの場合において、まず大量商品の個別的価値が市場価値を決定するという支配的大量規定を与えてから、「厳密に言えば」での加重平均規定を述べているのである。この点は注目に値する。マルクスは、少なくとも支配的大量規定を加重平均規定に先行させているのである。つぎに目につくことは、「下位相対的大量」の場合と「上位相対的大量」の場合とにおいては需給に関連する市場価値の規制が、「厳密に言えば」での市場価値の加重平均規定の叙述のあとで述べられていることである。念のために、(4)での「市場価格を規制する」というくだりでの「市場価格」は、「市場価値とは別ものであるかぎりでの市場価格ではなく、市場価値そのもの」(5)の貨幣的表現である。この市場価格は「一般的価値」すなわち市場価値を表現しているのである。それはともかく、(7)～(9)で述べられている支配的大量規定と加重平均規定とは「第一の規定」として分類されるべきものである。

ところで、「市場価値は、一面では、ある部面で生産される商品の平均価値と見なされるべきであり、他面では、その部面の平均的諸条件のもとで生産されてその部面の生産物の大量をなす商品の個別的価値と見なされるべきであら

表II 市場價值と加重平均規定

	条件別	商品量	價值總額	個別的價值	市場價值	市場價值總額	市場價格	市場價格總額	特別剩餘價值
(中位大質量・上・下均衡) 第一の場合	最悪(下位)	10	30	3	2	20	2	20	- 10
	中位	80	160	2	2	160	2	160	0
	最良(上位)	10	10	1	2	20	2	20	+ 10
	計平均	100	200	—	—	200	—	200	± 0
(下位相対的大質量) 第二の場合	最悪(下位)	70	210	3	2%	182	2%	182	- 28
	中位	20	40	2	2%	52	2%	52	+ 12
	最良(上位)	10	10	1	2%	26	2%	26	+ 16
	計平均	100	260	—	—	260	—	260	± 0
(上位相対的大質量) 第三の場合	最悪(下位)	10	30	3	1%	14	1%	14	- 16
	中位	20	40	2	1%	28	1%	28	- 12
	最良(上位)	70	70	1	1%	98	1%	98	+ 28
	計平均	100	140	—	—	140	—	140	± 0
		1	1%	—	—	1%	—	1%	—

う。」という命題があてはまるのは、「中位大量，上・下均衡」の場合においてのみ見られることである。「下位相対的大量」の場合においても、「上位相対的大量」の場合においても、そのようにはいえないのであって、支配的大量規定による大量商品の個別的価値は平均価値ではないし、加重平均規定による平均価値は、大量商品の個別的価値に一致しないのである。したがって、第二の場合と第三の場合には現実の市場では一つの市場価値しか成立しえないから、市場価値たりうるものは平均価値か大量商品の個別的価値かという選定の問題が生じるのである。これの決定または選定は、「第二の規定」でおこなわれているのである。支配的な価値としての市場価値も、加重平均規定による平均価値としての市場価値も、価値法則のうえからみて、同格なものと考えられていたものと思われるのである。もちろん、この二つの市場価値は、同じ市場で同時に共存することはできないのである。いずれの市場価値が、同じ市場で現実の市場価値たりうるのかを決めてくれるものが「第二の規定」といえよう。

ここで注意しておくべきは、加重平均規定としての市場価値の場合には、諸商品は価値——平均価値——どおりに売られるのであり、他方支配的大量規定により確定された「その部面での支配的な価値」としての市場価値の場合にはほぼ価値——平均価値——どおりに売られるのである。マルクスは、「価値どおりの、ほぼ価値どおりの、諸商品の交換は、云々」（傍点は東井）と述べたり、「諸商品が互いに交換されるさいの価格が諸商品の価値〔平均価値〕とほぼ一致するためには、云々」（〔 〕も傍点も東井）と述べたりしていること、また、「じっさい、非常に厳密に言えば」平均規定だが、「もちろん現実にはただ近似的に、非常にさまざまに変容して現われるだけである」、つまり現実には「下位相対的大量」と「上位相対的大量」の場合におけるように、平均価値とそれに近似的な価値——支配的大量規定による市場価値——として現われるだけであるというような趣旨のことを述べていることからして、マルクスは、ほぼ平均価値どおりの諸商品の交換も、平均価値どおりの諸商品の交換と同様に、価値法則の貫徹の仕方、または市場価値の貫徹の仕方と見ていたものと思われ

る。だからこそ、マルクスは、後の章（第39章）で、「第二の規定」をふまえたうえで、いわゆる限界規定を、「これこそは、市場価値——資本制的生産様式の基礎の上で、競争を媒介として自ら貫徹する市場価値——による規定である。」¹²⁾と述べたのである。

(4)～(9)までの市場価値にかんする規定について、マルクスはこう述べている。「市場価値にかんしてこれまでに与えられた諸規定では、生産される商品の分量は同じであり、与えられた量であるということが規定されている。また、相異なる条件のもとで生産されるこの商品分量の成分間の比率だけが変化するという、したがってこの同じ商品分量の市場価値がさまざまに違って規則されるということが想定されている。」

相異なる諸条件のもとで生産される「この商品分量の成分間の比率」が決定するものは平均価値——市場価値——である。この平均価値＝市場価値の決定は、供給側の商品比率による単なる市場価値＝平均価値の確定であるにすぎないものである。大量支配的規定も抽象的にはいわば生産条件の組み合わせによるものである。

以上要するに、「抽象的に」確定される市場価値は二様であって、大量商品の価値によって規制される市場価値——大量商品の個別的価値——と、「諸分量間の単なる比率」の結果として生じうる市場価値——平均価値——とがこれらである。(4)～(6)の支配的大量規定と、(8)と(9)での支配的大量規定と「厳密に言えば」での加重平均規定とは、「第一の規定」として分類されるべきものである。

マルクスは、「一方の側に一つの生産部門全体の生産物が立ち、他方の側に

12) いわゆる「限界規定」と述べたが、私はこれは「ほぼ・価値どおり」の諸商品の販売であって、限界規定とは考えていないのである。この点については稿をあらためて考察したい。Werke, Bd. 25, S. 673. 『全集』第25巻第2分冊, 852ページ。長谷部文雄訳, 河出書房版, 第3部下, 179ページ。向坂逸郎訳, 岩波書店版, 第3巻第2部, 831ページ。

社会的欲望が立つことになると、この社会的欲望の程度すなわちその量を考察することが必要である。」と考え、単に抽象的に確定された市場価値について、需要の側から見なおそうとするのである。まず、需給と関連する「第二の規定」についてのマルクスの叙述を整理してみれば以下の通りである。

〔Ⅱ〕「第二の規定」

(A) 需給の「普通の」組み合わせのもとでの市場価値

(3) 「平均価値での、すなわち両極の間にある大量の商品の中位価値での、商品の供給が普通の需要をみたす場合には、市場価値〔＝平均価値〕よりも低い個別的価値をもつ商品は特別剰余価値または超過利潤を実現するが、市場価値よりも高い個別的価値をもつ商品はそれに含まれている剰余価値の一部分を実現することができない。」（〔 〕内もゴシックも東井）。

(10) 「この商品量が普通の供給量だと仮定しよう。……いまこの商品量にたいする需要もまた普通の需要であれば、この商品は市場価値〔＝平均価値〕どおりに売られる。この市場価値〔＝平均価値〕を、前に研究した三つの場合のどれが規制しようとも、そうである。」（〔 〕内もゴシックも東井）。

(B) 需給の「異常な組み合わせ」のもとでの市場価値の規制

(2) 「最悪の条件や最良の条件のもとで生産される商品が市場価値を規制するということは、ただ異常な組み合わせのもとでのみ見られることであって市場価値はそれ自身市場価格の変動の中心なのである——といっても市場価格は同じ種類の諸商品では同じなのである。」（ゴシックは東井）。

(11) 「これに反して、需要が強くて、最悪の条件のもとで生産される商品の価値によって価格が規制されても需要が収縮しないような場合には、このような商品が市場価値を規定する。このようなことが可能なのは、ただ、需要が普通の需要を越える場合か、または供給が普通の供給よりも減る場合だけである。最後に、生産される商品の分量が、中位の市場価値で売れる程度よりも大きければ、最良の条件のもとで生産される商品が市場価値を規制する。」（ゴシックは東井）（いわゆる『不明瞭な個所』のⅡの個所）。

(12)「第二の場合には、……需要のほうがほんのわずかでも大きければ、不利な条件のもとで生産される商品の個別的価値が市場価格を規制する。／最後に、第三の場合のように、……。需要が供給に比べて弱ければ、有利な条件で生産される部分が、その大きさはどれだけであろうと、その価格をその個別的価値まで引き下げることによってのさばってくる。市場価値は、供給が需要を甚だしく超過する場合を除けば、最良の条件のもとで生産される商品の個別的価値とは一致しない。」(「需要が供給に比べて」以下が「不明瞭な」Ⅲの箇所)

(13)「これとは反対に、商品量がそれにたいする需要よりも小さいかまたは大きいならば、その場合には市場価値からの市場価格の背離が現われる。そして、第一の背離は、商品量が過少なばあいには、つねに、最悪の条件のもとで生産される商品が市場価値を規制し、もし商品量が過大な場合には、つねに、最良の条件のもとで生産される商品が市場価値を規制するということであり、したがって、相異なる諸条件のもとで生産される諸分量間の単なる比率からすれば別の結果が生ずるはずにもかかわらず、両極の一方が市場価値を規定するということである。需要と生産物量との差がもっと大きければ、市場価格も市場価値から上か下かにもっとひどくかたよるであろう。」(「不明瞭な」Ⅳの箇所)。

以上が需給に関連する「第二の規定」である。「第二の規定」は、「第一の規定」において供給側の商品比率から確定された諸市場価値を、需給の「組み合わせ」からとらえなおしてみようとするものである。この「第二の規定」は、需給の「普通の」組み合わせや需給の「異常な組み合わせ」に関連する市場価値の規定である。したがって、「第二の規定」の解明のためには、需給の「組み合わせ」の考察を必要とするであろう。節をあらためて考察しよう。

Ⅲ 需給の「普通の」組み合わせと「異常な」組み合わせ

マルクスは言う、「需要供給の一般的な概念規定での本来の困難は、それが同義反復になってしまうように見えるということである。」と。

市場で一定の商品量が売りつくされているときには、売りは買いであるか

ら、需要と供給とが一致しているように見えるかも知れない¹⁾。しかし、商品量がすべて売りつくされたからといって、需給が一致しているとは必ずしもいえないのである。というのは、市場に超過需要がある場合にはつねに商品量は

1) 大島雄一教授はこう言われている。「厳密にいえば、商品が販売されたかぎりでは、販売量についてはつねに需要供給は一致しているわけである。この意味での需給一致は事後的な需給一致といいうる。」(『資本論講座』4「利潤・利潤率」, 青木書店, 1964年。大島雄一『価格と資本の論理』未来社, 1965年, 350ページ)。

なお、城座和夫教授も次のように言われている。「需要と供給を実際に成立した購買量と販売量と考えるならば、同一の取引は売り手にとって販売であり、買い手にとっては購買であるからある商品の需要量と供給量が常に相等しいことは自明である。」(城座和夫『労働価値論の基本問題』ミネルヴァ書房, 1971年, 230—1ページ)。

桜井毅教授も、「市場価格そのものは、需要と対応する供給の関係を含んでいるのであって、そのかぎりでは需要供給はたえず一致していることになるのである。」と言われているが、しかし教授は、「しかしこれはまったく無内容である。」(桜井毅, 前掲書, 245ページ)と言われる。この「まったく無内容である」と言われるのは正しい。

これらの見解にたいしては、『資本論』第1巻第3章での次のマルクスの次の言葉が示唆的であろう。「どの売りも買いであり、またその逆でもあるのだから、商品流通は、売りと買いとの必然的な均衡を生じさせる、という説ほどばかげたものはない。その意味するところが、現実に行われた売りの数が現実に行われた買いの数に等しい、というのであれば、それはつまらない同義反復である。」(Werke, Band 23, S. 127. 岡崎次郎訳『全集』第23巻第1分冊, 149ページ。長谷部文雄訳本, 河出書房新社版, 『資本論』第1部全, 99ページ。向坂逸郎訳本, 岩波第1巻, 147ページ。本訳は岡崎訳本による)。

一定の市場価格での商品の売買は、必ずしも、需給の一致を意味しないのである。売り手側に売り惜しみがあり、これだけ支払能力のある社会的欲望を充足させていないかも知れないからである。かりにすべて売りつくされたとしても、超過需要がある場合にはこの商品量は需要に比べて過少であるであろう。したがって、売りは買いであるからといって需要と供給とが一致しているというのは、売りは買いであるという同義反復に落ち入っているか、まったく無内容以外のなにものでもない。

この点については高島永幹教授の次の見解は正しい。需給の一致とは、「一般に俗学的見解のように、生産され市場へ供給される商品量が、その価格のいかんを問わず、すべて売りつくされることではない。すなわち、商品の売り残りがなければ均衡しているという性質のものではない。」「需給の均衡とは、ほんらい一定の価値を前提とし、この前提のもとにそれぞれ一定のものとして現われる需要と供給とが互いに量的に一致するということである。そしてここに前提される価値は、一般に平均価値を意味することはいうまでもなからう。需給均衡の想定のもとに平均価値として決定される市場価値は、相異なる生産条件のもとで生産される商品の諸分量間における個別の価値の平均として定められる」(高島永幹「マルクスの市場価値論におけるいわゆる『不明瞭な箇所』について」茨城大『農学術報告』第8号, 1960年, 184ページ)。

売りつくされてしまうが、この商品量が需要をすべて充足しているとはいえず、したがって需給が一致しているとはいえないからである。それゆえに、売りは買いであるから、需給が一致しているというのは同義反復であって、需給が一致しているとは必ずしもいえないのである。

マルクスは言う、「需要のわに一定の社会的欲望の特定量があって、この欲望を充足するために市場における或る財貨の一定分量が必要だ、というふうに見えるが、だが、この欲望の量的規定性は、まったく弾力的であり動揺的である。欲望の固定性は仮象である。諸商品にたいする市場で代表された欲望・需要が現実の社会的な欲望と量的に相異なる限界は、もちろん、商品が異なれば甚だしく異なる。ここで私が言っているのは、要求された商品分量と、商品の貨幣価格が変動するとか買い手の貨幣事情や生活事情が変わるとかすれば要求されるべき商品分量との相違のことである。」(傍点は原文のまま)

このように、需要というものはつかまえてどこもないものである。「現実の社会的な欲望」の測定は不可能である。一定の商品量に対応しているかのように見える「市場で代表される欲望・需要」は、現実的にその商品量に合致した支出能力のある社会的欲望の量であるかどうかさえわからないのである。というのは、市場価値が下がればもっと需要がふえるかも知れないし、供給量がふえてもこれを吸収しうる需要があるかも知れないからである。逆に、もし商品の市場価値が「平均価値の一定限度を越えて高くなれば、『必要とされる生産物量』は減少する。」からである。すなわち「この量は、ただ、与えられた価格で必要とされるにすぎない——また少なくとも価格の一定の限度内において必要とされるにすぎない。」ので、「この特殊な生産部面についての『必要とされる生産量』は、けっして固定した大きさではない。」²⁾のである。

しかしながら、一定の商品の供給量に合致する需要を把握しなければ、需要と供給との一致について語ることができないのである。そこで、マルクスは、

2) Werke, Bd. 26, S. 202. 『全集』第26卷第2分冊, 265ページ。

「需要と供給との一致ということが意味していることの規定」について考える。そこでマルクスは問う、「需要と供給とが一致するのは、一定の生産部門の商品量がその市場価値〔この市場価値は全商品量の市場価値で平均価値イコール市場価値の倍数で表現されたもの〕どおりに、それよりも高くも安くもなく売れるように需要と供給との割合がなっている場合である。これは、われわれが聞く第一のものである。／第二に聞くものは、商品がその市場価値〔イコール平均価値〕どおりに売れる場合には需要と供給とが一致している、ということである。」（〔 〕内は東井）。すぐつづけて、マルクスは言う、「需要と供給とが一致すれば、それらは作用しなくなるのであって、またそれだからこそ商品はその市場価値〔イコール平均価値〕どおりに売られるのである。／需要と供給とが相殺されてしまえば、それはなにごとも説明しなくなり、市場価値には作用しないのであって、なぜ市場価値がちょうどこの貨幣額で表わされて他のどの貨幣額でも表わされないかということについては、需要供給はまったくなにも教えてくれないのである。資本制の生産様式の現実の内的諸法則は、明らかに、需要と供給との相互作用から説明することはできない。」（傍点は東井）。

そこで、マルクスは市場価値イコール平均価値どおりに売れるためには一致していなければならない供給と需要を、「一定の物品の生産に振り向けられる社会的労働時間の大きさ」と「この物品によってみたされるべき社会的欲望の大きさ」としてとらえなおして次のように言う。「ある商品がその市場どおりに売れるためには、すなわちそれに含まれている社会的必要労働に比例して売られるためには、この商品種類の総量に振り向けられる社会的労働の総量が、この商品にたいする社会的欲望すなわち支払能力のある社会的欲望の量に一致していなければならない。」と。

一定の商品種類の総量に費やされた社会的労働の総量に適合する「社会的欲望すなわち支払能力のある社会的欲望の量」は、市場においては「社会的欲望の要求する商品量、すなわち社会が市場価値を支払うことのできる商品量」として現われる。

ところが、供給される商品の量と、「社会的欲望の要求する商品量、すなわち社会が市場価値を支払うことのできる商品量」とのあいだには必然的な関連はなにもないのである。というのは、「下位相対的大量」の場合におけるように、社会は一定の商品量を、商品のより高い価値で規制された市場価値で購入しなければならないこともあれば、「上位相対的大量」の場合におけるように、社会はその商品の一定量を商品のより低い価値で規制された市場価値で買うことも可能であるからである。

供給の側面から見れば、「市場にある商品の量的大きさ」と、「商品がその市場価値で売られるような量」との間には必然的な関連はない。言いかえれば、市場にある商品量に費やされる社会的労働の総量と、「単位として役だつ商品または商品量の市場価値の倍数で」表わされる市場価値の総額とのあいだには「必然的な関係はなにもないのである。」というのは、「たとえば商品のうちのあるものは特に高い価値をもっているが他のものは特に低い価値をもっており、したがって、ある一定の価値額を一方の商品の非常に大きな量で表わすことも他方の商品の非常にわずかな量で表わすこともできるからである。」

市場にある商品量とこの商品の市場価値とのあいだには、「ただ次のような関連があるだけである。」「労働の生産性の一定の基礎の上では、」その商品量の「生産には一定量の社会的労働時間が必要であり、」この物品に支払わなければならない代価である商品（または貨幣商品）の生産にも一定量の社会的労働時間が必要であるということである。「社会のうち、自分の労働をこの特定の物品の生産に振り向けることを分業にとって引き受ける部分は、自分の欲望をみたす諸物品に表わされた社会的労働によって等価を受け取らなければならない。ところが、一方の、ある社会的物品に費やされる社会的労働の総量、すなわち社会がその総労働力のうちからこの物品の生産に振り向ける可除部分、つまりこの物品の生産が総生産のなかで占める範囲と、他方の、社会がこの一定の物品によってみたされる欲望の充足を必要とする範囲とのあいだには、少しも必然的な関連はないのであって、ただ偶然的な関連があるだけである。」

しかし、「この商品種類の総量に振り向けられる社会的労働の総量」と「この商品にたいする社会的欲望すなわち支払能力ある社会的欲望の量」に合致して、その商品が平均価値イコール市場価値で売ることができるものと想定しよう。マルクスは「需要と供給との一致ということが意味していること」を、この商品種類の総量に振り向けられた社会的労働の総量と、この商品にたいする社会的欲望すなわち支払能力ある社会的欲望の量との合致のことである、と規定したのである。この市場価値イコール平均価値で市場に供給される商品量を「普通の供給量」と見なし、この市場価値で要求された商品量を「普通の需要」と見なしたのである。そして、マルクスは、この平均価値イコール「市場価値を調整した規模」である商品量の需給を「普通の供給量」と「普通の需要」としておき、再生産される商品量にたいする需給が一致しているかどうかを検証しようとしたのである。念のために、平均価値イコール「市場価値を調整した規模」は、「前期の再生産」で見ると平均価値イコール「市場価値を調整した規模」と解いすればよいが、「今期の再生産」で見ようとするれば、平均価値イコール「市場価値を調整するであろう規模」と解いすればよいであろう。

いま再生産される量が需要が不変のもとで「普通の供給量」に一致すれば、再生産される商品量の需要と供給とが一致して諸商品は平均価値イコール市場価値どおりに売れるのである。いま再生産される量が「普通の供給量」であるとして、需要もまた「普通の需要」であれば、再生産される商品量の供給と需要とは一致して、諸商品は、平均価値イコール市場価値で売られるのである。これとは反対に、需要が不変だが再生産される商品量が「普通の供給量」よりも大きかったり小さかったりする場合や、再生産される商品量は不変だが、それにたいする需要が「普通の需要」よりも増えたり減ったりする場合には、再生産される商品量にたいする需要と供給とは一致せず、その商品量は、平均価値イコール市場価値どおりに売られなくなるのである。これについて、マルクスは次のように述べている。

「生産される商品の量と、商品がその市場価値で売られるような量との差

は、二つの原因から生ずることができる。一方の場合には、この量そのものが変動して過少または過大となり、したがって、与えられた市場価値を調整した規模とは違った規模で再生産が行なわれるようになる。この場合には、需要は変わらないのに供給が変わって、そのために相対的な過剰生産か過少生産が起きたのである。もう一つの場合には、再生産すなわち供給は変わらないが需要が減ったりふえたりするのであって、これはいろいろな原因から起きることができる。この場合には、供給の絶対量は変わらないのに、その相対量、すなわち欲望で計った供給量は変わっているのである。結果は第一の場合と同じで、ただ方向が逆になっているだけである。」(傍点は東井)。

このように理解すれば、次の章句はおのずと自明の理となるであろう。「一定の物品の生産に振り向けられる社会的労働の範囲が、みたされるべき社会的欲望の範囲に適合しており、したがって生産される商品量が不変な需要のもとでの再生産の普通の規模に適合してゐるならば、この商品は市場価値〔=平均価値〕どおりに売られる。諸商品の価値どおりの交換または販売は、合理的なものであり、諸商品の均衡の自然的法則である。この法則から出発して背理を説明すべきであって、逆に背理から法則そのものを説明してはならないのである。」(〔 〕内は東井)。念のために、ここに「再生産の普通の規模」と述べられるのは、市場価値イコール平均価値を調整した規模——「前期の再生産」——というふうに事後的なものとして考えてもよいし、市場価値イコール平均価値を調整するであろうような規模——「今期の再生産」——というふうに事前的なものとしても理解してもよいが、やはり事後的なものとして理解する方が理解しやすいし、道理にかなっていると思われる。

以上を小括しておこう。「需要と供給とが一致するのは、一定の生産部門の商品量とその市場価値〔市場価値イコール平均価値の倍数で〕どおりに、……売られるように需要と供給との割合がなっている場合である。／商品がその市場価値〔イコール平均価値〕どおりに売れる場合には需要と供給とは一致している。」(〔 〕内は東井)。この商品量が「単位として役だつ商品または商品量」の市場

価値イコール平均価値の倍数で表わされた市場価値の総額で売られるためには、それに含まれている社会的必要労働の総量で売られなければならない。したがって、「ある商品がその市場価値〔イコール平均価値〕どおりに売られるためには、すなわちそれに含まれている社会的労働に比例して売られるためには、すなわちそれに含まれている社会的必要労働に比例して売られるためには、この商品種類の総量に振り向けられる社会的労働の総量が、この商品にたいする社会的欲望すなわち支払能力のある社会的欲望の量に一致していなければならない。」それゆえに、需要と供給との一致が意味することは、この商品量の生産に振り向けられる社会的労働の総量と、この全商品量の市場価値を支払う能力のある社会的欲望の量の合致を意味するのである。この場合における市場価値イコール平均価値で市場に供給される商品量が「普通の供給量」のことであり、この市場価値で求められる商品量が「普通の需要」のことである。

次に、需給の「異常な組み合わせ」について見てみよう。

需給の「異常な組み合わせ」とは、需給の組み合わせが「普通」でない場合である。次の二つのマルクスの叙述をみくらべてみればこのことが明らかとなるであろう。

(i) 「最悪の条件や最良の条件のもとで生産される商品が市場価値を規制するということは、ただ異常な組み合わせのもとでのみ見られることである」(2)

(ii) 「最悪の条件のもとで生産される商品が……市場価値を規定する……ことが可能なのは、ただ需要が普通の需要を越える場合か、または供給が普通の供給より減る場合だけである。」¹¹⁾

「ただ異常な組み合わせのもとでのみ」という叙述は、「ただ需要が普通の需要を越える場合か、また供給が普通の供給よりも減る場合だけ」という叙述に対応しているのである。この対応から読みとれることは、「異常な組み合わせ」とは、需給が「普通の」組み合わせでないことを意味しているのである。言い換えれば、「異常な組み合わせ」とは、一定の生産部門の商品量が市場価値イコール平均価値どおりに売れるように需要と供給との割合がなっていない

ことをさしている。したがって、それは、この商品の総量に振り向けられる社会的労働の総量がこの全商品量の市場価値を支払う能力のある社会的欲望の量に一致していないことを意味するのである。

IV 需給の「組み合わせ」と市場価値の諸規定

すでに見たように、市場価値にかんする「第一の規定」により同じ生産部門において抽象的に確定された市場価値には、商品大量の価値によって規制される市場価値、すなわち大量商品の個別的価値と、加重平均として規定される市場価値すなわち平均価値とがあった。それでは、大量商品の価値によって規制される市場価値はどのような意義をもつのであろうか。端的に言えば、大量商品の個別的価値は、「その部面で支配的な価値、つまり平均価値に近似的な価値」にはかならないのである。マルクスは、「その部面で支配的な価値」を市場価値と見なしていた。このことは、マルクスが「その生産部面で支配的な価値、すなわち市場価値は、云々」¹⁾と述べていることからして明らかであろう。したがって、大量商品の価値によって規制される市場価値は、「その部面で支配的な価値」である。大量商品の個別的価値によって規制される「その部面で支配的な価値」が、「中位大量、上・下均衡」のように平均価値と一致することもあるが、しかしここでは市場価値（イコール平均価値）と区別して、平均価値と一致しない大量商品の個別価値すなわち市場価値を「その部面で支配的な価値」としてとらえることにしよう。そうすれば、抽象的に確定される市場価値は、加重平均としての市場価値と「その部面で支配的な価値」すなわち大量商品の個別的価値としての市場価値の二つである。同じ生産部門の内部で抽象的に確定される市場価値は、この二つであって、これ以外に確定されることはない。しかし、同じ市場において、与えられた時期に、二つの市場価値が同時に共存することはできないのである。繰り返して言えば、二つの違った市場

1) Werke Bd. 26, S. 267. 『全集』第26巻、第2分冊、352ページ。

価値が同じ市場において同時に共存することは決してありえない。そこで、同じ生産部門の内部で抽象的に確定された平均価値としての市場価値と、支散的な価値としての市場価値のいずれが、同じ市場においてある与えられた時期に諸商品の「共通的な価値」または「一般的価値」となりうるのかということが問題となるであろう。これの選定または決定をおこなうのが、需給と関連する「第二の規定」である。

さて、マルクスはこう述べている。「この商品量が普通の供給量だと仮定しよう。その場合、生産された商品の一部分がときには市場から引きあげられることもあるという可能性は無視することにしよう。いまこの商品量にたいする需要もまた普通のものであれば、この商品量はその市場価値で売られる。この市場価値を、前に研究した三つの場合のどれが規制しようともそうである。この商品量は、ただある欲望をみただけではなく、それをその社会的な範囲でみtasのである。」と。再生産される商品量が「普通の供給量」であり、需要もまた「普通の需要」であれば、その商品量は、「中位大量、上・下均衡」、「下位相対的大量」、「上位相対的大量」のいずれの場合でも、ある商品量はそれぞれ市場価値イコール平均価値どおりに売れると述べているのである。

再生産された商品の量が「普通の供給量」であり、需要もまた「普通の需要」であるということは、すでに明らかにしておいたように、次のことを意味する。「前期再生産」で市場価値（イコール平均価値）を調整した生産の規模——「再生産の普通の規模」または「普通の供給量」——と同じ規模で「今期の再生産」が行われ、「今期の再生産」の商品量にたいする需要もまた、「前期の再生産」の商品量にたいする社会的欲望の量、すなわちその全商品量の市場価値で購買された商品量——「普通の需要」——であるということの意味する。したがって、再生産される「この商品総量に振り向けられる社会的労働の総量が、この商品にたいする社会欲望の量に一致している」のである。「それぞれの商品種類に振り向けられる労働の総量を絶えずこの限度に引きもどそうとする」のは、言うまでもなく、「競争、需要供給関係の変動に照応する市場価格の変

動である」。

需要供給についてみれば、「供給は一定の商品種類の売り手または生産者の総計に等しく、需要は同じ商品種類の買い手または消費者（個人的または生産的）の総計に等しい。しかも、この二つの総計は、それぞれ一体として、集合力として、互いに作用し合う。ここでは個人は、ただ、一つの社会的な力の部分として、質量の原子として、作用するだけであって、まさに、このような形で競争は生産と消費との社会的な性格を認めさせるのである。」（傍点は原文のまま）。

「同じ生産部面の、同じ種類のそしてほぼ同じ品質の諸商品がその価値〔イコール平均価値〕どおりに売られるためには、……第一に、相異なる個別的諸価値が一つの社会的価値に、前述の市場価値〔イコール平均価値〕に、平均化されていなければならない。そして、そのためには、同じ種類の商品の生産者たちのあいだの競争が必要であり、また彼らが共通に彼らの商品売り手に出す一つの市場の存在が必要である。同種の諸商品、といってもそれぞれ個別的な色彩を異にする諸事情のもとで生産されている諸商品の市場価格が市場価値〔イコール平均価値〕と一致して、それより上がることによっても下がることによっても市場価値〔イコール平均価値〕から背離しないためには、いろいろな売り手が互いに加え合う圧迫が十分に大きくて、社会的欲望の要求する分量の商品量、すなわち社会が市場価値〔イコール平均価値〕を支払うことのできる商品量を市場に出させることができるということが必要である。」（〔 〕内は東井、傍点は原文のまま）。これは、売り手たちのあいだでの競争によって市場価値イコール平均価値の成立が説かれているのであって、「第一の規定」に分類されるものではなくして、「第二の規定」に分類されるものである。そしてこれは、競争が、一つの部面で、「諸商品の相異なる個別的諸価値から、一つの同等な市場価値〔イコール平均価値〕および市場価格〔イコール平均価格〕を成立させる」ことについて述べられたものである。ここでは、競争は、需要が与えられた大きさであるから、売り手たち間での競争だけが論じられている。しかし、現実には、「資本家たちどうしの競争」、「彼らと商品の買い手との競争」、「商品の買

い手どうしの競争」のいわゆる「三面の競争」が作用して同一の市場価値を成立させるのである。したがって、「この場合には、一部は資本家たちどうしの競争、一部は彼らと商品の買い手との競争、また商品の買い手どうしの競争が作用して、そのために、特殊な生産部面の各個の商品の価値は、この特殊な社会的生産部面の商品総量が必要とする社会的労働時間の総量によって規定されることになり、個々の商品の個別的価値または個々の商品がその特殊な生産者および売手に費やさせた労働時間によっては規定されないことになる。」²⁾（傍点は原文のまま）。

さて、もとに戻って、再生産される商品量が、その市場価値（イコール平均価値）どおりに売れるということは、その商品量の生産に必要なとした社会的労働が、「社会的に有用な形態で」支出されていることを実証することを意味するものである。というのは、商品は、「貨幣所持者にとっての使用価値でなければならず、したがって、商品に支出された労働は社会的に有用な形態で支出されていなければならない」³⁾（傍点は東井）からである。

一定の生産部面の商品の一定量に支出された社会的労働が有用な形態で支出されているかどうかの検証をしてくれるのも、市場価値にかんする需給に関連する「第二の規定」であると考えてもよいであろう。かつて、白杉庄一郎氏はこう述べられた。「商品価値の決定者としての社会的労働時間は、単に生産技

2) Werke, Bd. 26, S. 203. 『全集』第26巻第2分冊, 266ページ。

3) 「社会的分業は彼の労働を一面的にするとともに、彼の欲望を多面的にしている。それだからこそ、彼にとって彼の生産物はただ交換価値としてのみ、役だつのである。しかし、彼の生産物はただ貨幣においてのみ一般的な社会的に認められた等価形態を受け取るのであり、しかもその貨幣は他人のポケットにある。それを引き出すためには、商品はなによりもまず貨幣所持者にとっての使用価値でなければならず、したがって、商品に支出された労働は社会的に有用な形態で支出されていなければならない。言いかえれば、その労働は社会的分業の一環として実証されなければならない。」（傍点は東井）（Werke, Bd. 23, S. 120—1. 『全集』第23巻第1分冊, 141ページ。長谷部文雄訳, 河出書房新社版, 第1部全, 93ページ。向坂逸郎訳, 岩波書店版, 第1巻, 138—9ページ）。

術のうえから見た必要労働時間なのではなくて、それを基礎として同時に、その商品に対する社会的欲望から規定されるところがあるのでなければならない。」⁴⁾と。まさに至言といえよう。市場価値に関しても「単に生産技術の上から見た必要労働時間」からの確定が、「第一の規定」であり「その商品にたいする社会的欲望からの規定」が「第二の規定」である。といっても、「社会的欲望の量」からの規定は、同じ市場において同じ時期に存立しうる一つの市場価値が平均価値としての市場価値であるのか、それとも「その部面で支配的な価値」としての市場価値——市場価値は同じ生産部面ではこの二つ以外にありえない——であるのかということを決定しうるにすぎないのではあるが。

ところで、「需要供給は市場価格を規定する。」のである。再生産される商品の分量が、「社会的欲望の要求する分量の商品量、すなわち社会が市場価値を支払うことができる商品量」を越えれば、その市場価格は、その市場価値（イコール平均価値）から下方へ背離するであろう。「市場が供給過剰の場合には」、「中位大量、上・下均衡」、「下位相対的大量」、「上位相対的大量」の三つのいずれの場合でも、「最良の条件のもとで生産される部分が市場価格を規制するのであるが」、この市場価格は、「中位大量、上・下均衡」の場合と「下位相対的大量」の場合には「市場価値と別もの」であって、「このような場合はここでは問題にしない。」「上位相対的大量」の場合には、この市場価格が事実上表現する「一般的価値」は「その部面での支配的な価値」としての市場価値——大量商品の個別的価値——が表わしている労働時間と一致し、この市場価格は市場価値とは別物ではない⁵⁾。すなわち、「中位大量、上・下均衡」と「下

4) 白杉庄一郎『価値の理論』（ミネルヴァ書房、1955年）91ページ。

5) 「上位相対的大量」において、「市場が供給過剰の場合には」大量商品の個別的価値によって規制される市場価格が、大量商品の個別的価値によって規制される市場価値とは「別物ではない」といっても、市場価格と市場価値とが同一化するのではない。市場価格は飽迄も「価格次元」のものであって、市場価値は「価値次元」のものである。市場価格は需給の変動に応じて変動し、抽象的に確定された平均価値に一致したり、またはその平均価値から背離して大量商品の個別的価値によって規制された「支

位相対的大量」との場合のいずれにおいても、「市場が供給過剰の場合には、いつでも、最良の条件のもとで生産される部分が市場価格を規制するのであるが、このような場合はここでは問題にしない。われわれがここで取り扱うのは、市場価値と別ものであるかぎりでの市場価格ではなく、市場価値そのもののいろいろな規定なのである。」したがって、「下位相対的大量」の場合には、需要が不変のもとで、再生産される供給量が「普通の供給量」を越える場合には、市場価格は、市場価値から下方へ背離する。そして、市場価格は、平均価

配的な価値」に一致するという点だけである。市場価値と市場価格の合致ということとは、市場価値の表現する一般的価値すなわち社会的労働と市場価格の表現するそれとが同じ大きさであるということの意味する。

松石勝彦教授はこう述べられている。「このように全身全霊その正体が価値である市場価格こそ、需給不一致の場合の市場における価値の特殊な発現形態つまり市場価値にほかならない。需給不一致のとき、価値は市場において、先述の需給一致のときの市場価値とは同様に、特殊な市場価値という姿をとって現象せざるをえない。第一の意味の市場価値〔平均価値—東井〕から背離する市場価格から貨幣表現というベールをはぎとってやると、そこに生身の市場価値が露出する。市場価値と市場価格は、貨幣表現という切り換え二段スイッチによって、自由自在にどちらにでも切りかえられるのである。たとえていえば、それは、いわば玉虫のように、ツートン・カラーであり、価値的側面からみれば市場価値であり、貨幣表現的側面からみれば市場価格である。」(傍点は原文のまま)(松石勝彦、前掲書、119ページ)。

この見解は誠に興味を引くものであるが、必ずしも正確な叙述とはいえないようである。というのはこうである。需給不一致のもとで成立する市場価格はなんであれ、それは事実上たしかに一定量の価値を表現するものである。なぜならば、貨幣商品は一定量の価値を相対的に表現するものであるからである。しかし、需給不一致のもとでの諸市場価格がすべて市場価値とはなりえないのである。もちろん、松石教授も需給不一致のもとでの諸市場価格がすべて市場価値であるとは考えられていないであろう。需給不一致のもとでの市場価格は、ただ、同じ生産部面で抽象的に確定された一つの市場価値、すなわちその部面で支配的な価値にある時点、または与えられた長短の期間において、一致したり一致しなかったりするだけである。生産部面で抽象的に確定された「支配的な価値」に、同じ市場において需給不一致のもとでの市場価格が一致したときには、その「支配的な価値」が現実の市場価値たりうるのである。そしてこの市場価値にかぎって言えば、たしかに、松石教授の言われるとおりである。その場合でも、市場価値は「価値次元」のものであり、市場価格は「価格次元」のものであるということをおぼろげに忘れてはいけないのである。

値からもその部面での支配的な価値からも背離してゆく。それゆえに、供給過剰の場合に、最良の条件のもとで生産される個別的価値が規制するものは市場価格であって市場価値ではない⁶⁾。

いよいよ、問題の「下位相対的大量」と「上位相対的大量」の場合における需給の「異常な組み合わせ」のもとでの市場価値の規定について見てみよう。

「下位相対的大量」という第二の場合には、「需要のほうがほんのわずかでも大きければ、不利な条件のもとで生産される商品の個別的価値が市場価格を規制する。」(12)。この大量商品の個別的価値は、「この部面で支配的な価値」、すなわち抽象的に確定された市場価値であった。需要のほうがほんのわずかでも大きければ、市場価格は、平均価値から背離して上昇し、大量商品の個別的と等しくなるであろう。しかも、需要が強くて、市場価格が大量商品の価値によって規制されても収縮しないならば、この市場価格が事実上表現する「一般的価値」を、価値次元でとらえなおして見ればその「一般的価値」は市場価値であるといえよう。したがって、市場価格は、大量商品の個別的価値によって規制されることになり、市場価値と一致するのである。そこで注意すべきことは、市場価格が市場価値に転化するものではなく、市場価値に転化するのは相異なる諸個別的価値である。市場価格は飽くまでも「価格次元」のものであ

6) これまで、私は、需給比率のいかんによっては、「中位大量，上・下均衡」という第一の場合においても、最悪の条件または最良の条件のもとで生産される商品の個別的価値が市場価値を規制することもありうる、と考えていた。(拙稿「いわゆる『不明瞭な箇所』—マルクスの市場価値論について」関西大学『経済論集』第17巻第5号，1967年12月，59ページ。「『市場価値論』考—需給との関連において」関西大学『経済論集』第26巻第4，5号，1977年1月，287ページ。)しかし、この考え方は本文で明らかにしたように、間違いであった。次のように訂正しておく。すなわち、「中位大量，上・下均衡」の第一の場合においては、「異常な諸組み合わせ」・需給不一致のもとでは、市場価格が市場価値から背離するのであって、最悪の条件または最良の条件のもとでの個別的価値が市場価値を規制することは決してありえない。念のために、この第一の場合には、市場価値は「その部面での支配的価値」である中位の条件のもとで生産される商品の個別的価値であるとともに、平均価値でもあって、この部面で抽象的に確定される市場価値はただ一つである。

り、市場価値は飽くまでも「価値次元」のものであって、市場価格は市場価値に転化できないのである。一方で、大量商品の個別的価値がこの生産部面での「一般的な価値」であり、他方でこの市場価格は、「事実上この部面の諸商品の一般的な価値を表現する」（このか所は前出し）。

この第二の場合において、大量商品の価値によって規制される市場価値が表現する社会的労働時間は、この商品量に必然的に含まれている社会的労働時間よりも大きいのである。したがって、「一定の商品の商品種類の生産に振り向けられる社会的労働の範囲が、この生産物によってみだされるべき特殊な社会的欲望の範囲にとって小さすぎる場合である」。言い換えれば、再生産される商品量は「前期再生産の量」と同じだが、「需要が普通の需要を越えた場合」である。すなわち、「前期再生産」で一定の市場価値（イコール平均価値）を調整した規模と同じ規模で今期生産が行われたが、需要が「普通の需要」よりも大きくなったのである。「この場合には、供給の絶対量は変わらないのに、その相対量、すなわち欲望と比べての、または欲望で計った供給量は変わっているのである。」あるいはまた、需要が不変のもとで、平均価値イコール「市場価値を調整した規模」よりも小さい規模で今期の再生産が行なわれて、需要が供給を上回ることになったのである。

供給が「普通の供給量」であるのに需要が「普通の需要」を越える場合、および需要が不変のもとでも再生産される商品量が「普通の供給量」より減る場合には、すでに明らかにしておいたように、この商品総量に振り向けられた社会的労働の総量が、この商品にたいする「社会的欲望ないし支払能力のある社会的欲望の量」に合致していないのであって、その商品量は、市場価値イコール平均価値どおりに売れなくなるのである。

しかしながら、大量商品の個別的価値によって規制される市場価値で商品が売られる場合には、この商品総量に振り向けられた社会労働の総量が、この商品にたいする「社会的欲望の量」にほぼ合致していることも事実である。両者の不一致を強調するのあまり、ほぼ合致しているという事実を看過しがちであ

る。ほぼ合致しているという事実を見落すべきではない。これまでこの点をもっと強調すべきではなかったか。

「下位相対的大量」の場合において、需給の「異常な組み合わせ」のもとで、すなわち再生産される商品量は「普通の供給量」だが需要が「普通の需要」を越える場合とか、需要が不変のもとで再生産される商品量が「普通の供給量」よりも少なくなる場合には、市場価格が平均価格——平均価値——から背離して上昇し最悪の条件のもとで生産される大量商品の個別的価値に等しくなるとしよう。市場価格は、抽象的に確定されたいま一つの市場価値——その部面で支配的な価値——に一致したのである。市場価格が上昇し需要が収縮すれば、市場価格は下がるであろう。しかし、「需要が強くて、最悪の条件のもとで生産される商品の価値によって価格が規制されても需要が収縮しないような場合には、このような商品が市場価値を規定する。」(11)ことになる。いまや、同じ市場での現実の市場価値は、大量商品の個別的価値であるといえよう。

「下位相対的大量」という第二の場合において、同じ市場において需給不一致のもとで一つの市場価値——最悪の諸条件のもとで生産される大量商品の個別的価値によって規制される市場価値——を競争がどのようにして成立させるかについてマルクスはこう述べている。

「この特定の種類の商品にとって需要が供給よりも大きければ、ある買い手が——ある限界のなかで——他の買い手よりも高い値をつけ、こうしてその商品をだれにとっても市場価値〔イコール平均価値〕より高くするのであるが、他方では売り手たちが共同して高い市場価格で売ろうとする。」(〔 〕内は東井)。

こうして、市場価格は、平均価値よりも競り上げられて、最悪の条件のもとで生産される個別的価値の高さまで上がることになる。「需要が強くて、最悪の条件のもとで生産される商品の価値によって価格が規制されても需要が収縮しないような場合には、このような商品が市場価値を規定する。」こうして競争は、生産部面において抽象的に確定された市場価値——すなわち、最悪の条件のもとで生産される大量商品の個別的価値によって規制される市場価値——

を、同じ市場において現実の市場価値として成立させるのである。

マルクスが「需要が強くて、最悪の条件のもとで生産される商品の価値によって価格が規制されても需要が収縮しない場合には、このような商品が市場価値を規定する。」と述べていることに注目しよう。マルクスは、まず「価格次元」または「貨幣表現的側面」から最悪の条件のもとで生産される商品の価値によって規制される価格をとらえ、この価格が事実上表現する「一般的価値」を「価値次元」または「価値的側面」からこの「一般的価値」を市場価値としてとらえなおしているのである。これは当然のことといえよう。というのはこうである。たとえば綿布製造業者の生産物綿布100エレは、「ただ貨幣においてのみ一般的な社会的に認められた等価形態を受け取る」⁷⁾からである。しかし、その綿布 100 エレの生産に必要な社会的労働時間と等価の貨幣額を受け取りうるという保証はないのである⁸⁾。需要が供給を越える場合には、その商品量は、その生産に必要な社会的労働時間が支出されたはずにもかかわらず、その労働時間以上の労働時間が支出されているものと見なされ、等価以上の貨幣額を受けとるのである。

それはともかく、マルクスが述べているように、「この特定の種類の商品にとって需要が供給よりも大きければ、ある買い手が——ある限界のなかで——他の買い手よりも高い値をつけ」、こうしてだれにとっても平均価値よりも高くするのであるが、「他方で売り手たちが共同して高い市場価格で売ろうとするのである。」要するに $D > S$ の場合には最悪の諸条件のもとで生産される大

7) Werke, Bd. 23, S. 120—1. 『全集』第23巻第1分冊, 141 ページ。長谷部文雄訳, 河出書房版, 第1部全, 93ページ。

8) 他のポケットにある貨幣を、「引き出すためには、商品はなによりもまず貨幣所持者にとっての使用価値でなければならず、したがって、商品に支出された労働は社会的に有用な形態で支出されていなければならない。言いかえれば、その労働は社会的分業の一環として実証されなければならない。／労働が、われわれの織職のそのように、社会的分業の公認された一環であってもまだそれだけでは彼の20エレのリンネルそのもの使用価値はけっして保証されていない。」(Werke, Bd. 23, S. 121. 訳本はすべて同上。)

量商品の個別的価値が市場価格を規制するようになるのは当然のことであろう。「下位相対的大量」のような場合には、需要が供給よりも大きくなれば、最悪の条件のもとで生産される大量商品が、「三面の競争」の作用によって、市場価値を規制するというのは、至極当然のことと思われる。しかも、この特定種類の商品たとえば綿布が1エレを3シリング——大量商品の個別的価値の貨幣名——で売られるとすれば、大量商品がそれらの価値どおりに売られているのである。それはあたかも、「中位大量，上・下均衡」の場合において、たとえば綿布製造業者が「たとえば綿布1エレを2シリングで——平均価値で——売るとすれば、彼らはそれを、自分たちの生産した1エレが現物のままで表わしている価値どおりに売る。」⁸⁾ように。このことは、肝心要のことだと思われる。大量商品がその個別的価値どおりに売られるということは、大量商品の価値を価格規制者たらしめる一つの強制として作用するものと思われる。

なお、「下位相対的大量」の場合に、需要が供給よりも大きいときに、市場価格を規制しうるのは、もはや平均価値ではなくして、最悪の条件のもとで生産される大量商品の個別的価値である。これ以外には価格決定者となりうるものはないと思われる。この点からしても、大量商品の個別的価値が市場価値を規制するというのは至極当然のことと思われる。

ところで、この市場価格の「正体、内実は何か」と言えば、この市場価格が事実上表現しているこの部面の諸商品の「一般的価値」にはかならないのである。そして、この「一般的価値」は、言うまでもなく、「その部面で支配的な価値」にはかならないのである。この「支配的な価値」は、生産部面で抽象的に確定された市場価値でもある。したがって、この市場価格を「価値次元」でとらえ直せば市場価値なのである。だからといって、市場価格が市場価値たりうるものではなくし、市場価格は飽迄も「価格次元」のものであって、市場価格はやはり市場価格である。他方で、市場価値は飽迄も「価値次元」のもので

8) Werke, Bd. 26, S. 202. 『全集』第6巻第2分冊, 264ページ。

あって、この市場価値は、「その部面で支配的な価値」にほかならないのである。言い換えればこの市場価値が表現する支配的な価値が、その市場価格が表現する一般的価値とが等しいということだけである。

しかしながら、「下位相対的大量」の場合に、最悪の条件のもとで生産された大量商品の個別的価値が市場価値を規制するならば、この商品量の生産に必要なとされた社会的労働時間と、単位として役だつ商品の倍数で表現される市場価値の総計が表現する社会的労働時間とは相違するのである。たとえば、表 I 「市場価値と支配的大量規定」の第 2 の場合において、この商品量たとえば綿布 100 エレの生産に必然的に含まれる社会的労働時間は 260 労働時間であるが、この全商品量の市場価値は 300 労働時間（ $=3 \times 100$ ）である。したがって、その全商品量の市場価値は、その全商品量に必然的に含まれている社会的労働時間よりも多量の社会的労働を表現しているのである。1 エレ当たりの綿布の生産に必然的に含まれている労働時間が 2% 労働時間であるにもかかわらず、それがあたかも 3 労働時間であるかのように 3 シリング——3 労働時間の貨幣名——で売られる。したがって、後で詳しくみるように、「必要労働時間はここでは別個の意味を含むのである。」⁹⁾とはいえ、この商品種類は 1 エレ当たり 3 シリングで売られるなれば、平均価格——平均価値の貨幣的表現——に近似的に売られることであって、「ほぼ価値どおりに」販売（交換）できたことになるのである。

最後に、「下位相対的大量」という第三の場合について見てみよう。

需要が不変のもとで、「与えられた市場価値 [=平均価値-東井] を調整した規模とは違った規模で再生産が行われ」、供給が「普通の供給量」を越えた場合とか、または再生産は「与えられた市場価値 [=平均価値-東井] を調整した規模」と同じ規模で行われたが、需要が「普通の需要」より減った場合には、市

9) Werke, Bd. 25, S. 648—9. 『全集』第 25 卷第 2 分冊, 821 ページ。長谷部文雄訳, 河出書房版, 第 3 部下, 159 ページ。向坂逸郎訳, 岩波書店版, 第 3 卷, 800—1 ページ。このか所は、すぐ後で引用する。

市場価値は、最良の条件のもとで生産される大量商品の価値によって規制されるであろう。このようにして規定された市場価値は、平均価値ではないが、この部面での「支配的な価値」であるであろう。平均価値どおりではないが、ほぼ平均価値どおりの諸商品の販売・交換が見られるのである。

マルクスは言う、「ある商品種類の各個の物品または各一定量は、ただその生産に必要な社会的労働だけを含んでいるとしても、そして、この面から見れば、この商品種類全体の市場価値はただ必要な労働だけを表わしているとしても、もしこの一定の商品がそのときの社会的欲望を越える程度に生産されているならば、社会的労働時間の一部分は浪費されたのであって、その場合にはこの商品量は市場では現実にそれに含まれているよりもずっとわずかな量の社会的労働を代表するのである。」(傍点は東井)。言い換えれば、この商品種類全体の市場価値、たとえば綿布全量100エレの市場価値100労働時間——1労働時間が1シリングとすれば、その貨幣名では100シリング——は、もしこの一定の商品がそのときの社会的欲望を越える程度に生産されているならば、社会的労働の一部分(40労働時間=140労働時間-100労働時間)は浪費されたのであって、言うまでもなく、この社会的労働の一部分は然償で社会に贈与されることになる。その場合、この全商品量が販売されるという、われわれの想定のもとでは、この商品量はそれに必然的に含まれている労働時間すなわち140労働時間よりもずっとわずかな量すなわち100労働時間の社会的労働を代表するものとして販売されるのである。マルクスは、後の第6篇第37章で次のように述べている。

「もしこの分業が均衡のとれたものであれば、相異なる諸群の生産物はそれらの価値で(さらに展開すればそれらの生産価格で)、売られるか、または、この価値または生産価格が一般的諸法則に規定されて変容されたものである価格で売られる。これこそは、じっさい、個々の商品または物品に関してではなく、分業によって独立化された特殊な社会的諸生産部面のそのつどの総生産物にかんして効力を現わす価値の法則である。／社会的欲望、すなわち社会的規模での

使用価値がここでは社会的総労働時間のうちからいろいろな特殊な生産部面に割り当てられる部分を規定するものとして現われるのである。しかし、それは、すでに個々の商品の場合にも現われる同じ法則でしかない。すなわち、商品の使用価値は商品の交換価値の、したがってまた商品の価値の、前提だという法則である。……たとえば、割合から見て多すぎる綿織物が生産されているとしよう。といっても、織物というこの総生産物には与えられた条件のもとでそのために必要な労働時間だけが実現されているとしよう。しかし、とにかく特殊な部門では多すぎる社会的労働が支出されているのである。すなわち、生産物の一部はむだなのである。だから、その全体が、まるでそれが必要な割合で生産されてでもいるかのようにしか売れないのである。このような、社会的労働時間のうちからいろいろな特殊な生産部面に振り向けることのできる部分の量的な制限は、ただ価値法則一般のいっそう展開された表現でしかないのである。といっても、必要労働時間はここではまた別個の意味を含むのである。つまり、社会的労働時間のうちこれだけの分量が社会的欲望の充足のために必要だということである。制限はここでは使用価値によって生ずる。」¹⁰⁾

さて、「上位相対的大量」の場合に、需給の「異常な組み合わせ」のもとで最良の条件のもとで生産される大量商品の個別的価値によって市場価値が規制されるならば、この全商品量の市場価値は、この全商品量に必然的に含まれる社会的労働時間よりも少量の社会的労働時間しか含まれていないかのように売られるのである。必要労働時間は「ここでは別個の意味を含む」のである。

最良の条件のもとで生産される大量商品の価値によって規制される市場価値、すなわち「その部面で支配的な価値」を現実の市場で成立させるのは、競争の作用によってである。マルクスはこれについて言う、「供給の方が需要よりも大きければ、ある一人がいっそう安く売りとばすことを始め、他の人々も

10) Werke, Bd. 25, S. 648—9.『全集』第25巻第2分冊, 820—1ページ。長谷部文雄訳、河出書房版, 第3部下, 158—9ページ。向坂逸郎訳、岩波書店版, 第3巻第2部, 799—801ページ。

これにならわなければならなくなるが、他方、買い手たちは共同して市場価格をできるだけ市場価値〔イコール平均価値〕よりも低く引き下げようとする。…さらに、もしある一人がより安く生産して、そのときの市場価格〔平均価格〕または市場価値〔平均価値〕よりも安く売ることによって多く売りさばくことができ市場でより大きな範囲を占めることができるならば、彼はそうするのであり、こうして、だんだん他の人々により安い生産の仕方の採用を強制して社会的必要労働を新たなより小さい程度まで引き下げてゆく行動が始まるのである。〕(〔 〕内は東井)。

以上要するに、「商品量がそれにたいする需要よりも小さいかまたは大きいならば、その場合には市場価値からの市場価格の背離が現われる。そして第一の背離は、「下位相対的大量」の場合には〕つねに、最悪の条件のもとで生産される商品が市場価値を規制し、「上位相対的大量」の場合において〕もし多すぎれば、つねに、最良の条件のもとで生産される商品が規制するということであり、「下位相対的大量」および「上位相対的大量」の場合におけるように〕相異なる諸条件のもとで生産される諸分量間の単なる比率からすれず別の結果〔平均価値のこと〕が生ずるはずにもかかわらず、両極端の一方が市場価値を規定するということである。需要と生産物量との差がもっと大きければ、市場価格も市場価値〔両極の一方で規定される市場価値〕から上・下にいっそう大きく背離するであろう。〕(〔 〕内東井)。マルクスは、需給の「異常な組み合わせ」のもとで成立するこの市場価値もまた「それ自身市場価格の変動の中心である」と述べている。

これまでの需給のいろいろな「組み合わせ」のもとでの市場価値の諸規定には次のような想定があった。「生産される商品の分量は同じであり、与えられた量であるということ、……また、この商品量のうちのさまざまな条件のもとで生産されるいろいろな成分の比率だけが変化するということ、……この同じ商品量の市場価値がいろいろに違って規制される……場合、生産された商品の一部分がときには市場から引きあげられることもあるという可能性は無視すること」等がその想定である。もしもこの想定がなければ、次のようなマルクス

の説明が生きてくるであろう。その説明を容易く理解するためには、「中位大量、上・下均衡」の場合において考えることが望ましい。マルクスは、以下のように説いている。

「需要供給関係は、一方ではただ市場価値からの市場価格の背離を説明するだけであり、または他方ではただこの背離の解消への、すなわち需要供給関係の作用への解消への、傾向を説明するだけである……。需要と供給とは、それらの不一致によってひき起される作用の解消をさまざまな形で実現することができる。たとえば、需要が減り、したがって市場価格が下がれば、その結果は、資本が引きあげられて供給が減らされるということになりうる。しかし、また、必要な労働時間を短くする諸発明によって市場価値そのものが引き下げられ、それによって市場価値と一致させられるということにもなりうる。これとは反対に、需要が増し、それとともに市場価格が市場価値よりも高くなれば、その結果は、この生産部門に多すぎる資本が供給されて生産がふやされ、したがって市場価格そのものが市場価値よりも安くなるということにもなりうる。あるいはまた、他方では、価格騰貴のために需要そのものが元のように減らされるということにもなりうる。また、あれこれの生産部門では、市場価値そのものが長短の期間にわたって上がるということにもなりうる。というのは、要求される生産物の一部分はこのようなときにはより悪い条件のもとで生産されなければならないからである。」

ついでに述べておけば、需要が増し、価格が騰貴すれば、要求される生産物の一部分が「より悪い条件のもとで生産されなければならない」ことになり、大部分の商品量が悪い条件のもとで生産されるようになれば、「下位相対的大量」という「第三の場合」が出現することになるのである。このように工業でも「下位相対的大量」がみられるのであって、「下位相対的大量」を農業に限定して考える必要はないであろう。

IV 結 言

本稿で明らかにした諸点を要約して結びにかえたい。

1. 生産部面での市場価値にかんする「抽象的な」確定を「第一の規定」と考えた。ここに「抽象的な」という形容語は、「社会的欲望の量すなわち支払能力のある社会的欲望の量」または「諸商品にたいする市場で代表される欲望・需要」の考察を捨象するということを意味する。需給と関連する市場価値の規定を「第二の規定」とした。通説では、「加重平均規定」のみが「第一の規定」とされるが、その通説にしたがわず、「第一の規定」を市場価値にかんする「抽象的な」確定に限定して理解した。したがって、「第一の規定」には加重平均規定とともに支配的大量規定も含まれることになる。なお、「第二の規定」はいわゆる「不明瞭な個所」における市場価値規定にもかかわるものである。

2. 生産部面で抽象的に確定される市場価値は、平均価値としての市場価値と、「その部面での支配な価値」——すなわち、大量商品の個別的価値——としての市場価値の二つだけである。現実の同一市場では、この二つが同時に共存することはできない。この二つのうちのいずれかを現実の市場で市場価値として成立させるのは競争、需要供給関係であり、すなわち「第二の規定」がこれを行うものである。

3. 「異常な組み合わせ」とは需給の「異常な組み合わせ」のことであって、「下位相対的大量」または、「上位相対的大量」のような商品間の比率の「異常な組み合わせ」ではない。

4. マルクスは、「需要と供給とが一致するのは、一定の生産部門の商品量はその市場価値どおりに、……売れように需要と供給との割合がなっている場合である。」と考え、したがって商品が「市場価値どおりに売れる場合には需要と供給とは一致している」と述べ、「ある商品が市場価値どおりに売られるためには、すなわちそれに含まれている社会的必要労働に比例して売られるためには、この商品種類の総量に振り向けられる社会的労働の総量が、この商品

にたいする社会的欲望すなわち支払能力のある社会的欲望の量に合致していなければならない。」と規定した。それゆえに、需給の一致の意味することは、「この商品種類の総量に振り向けられる社会的労働の総量が、この商品にたいする社会的欲望 すなわち支払能力のある 社会的欲望の 合致」ということである。言いかえれば、市場に供給される商品量が社会がその全商品量の市場価値、すなわち「単位として役だつ商品」の市場価値イコール平均価値の倍数として表わされた市場価値を支払うことのできる商品量、または支払能力のある社会的欲望の量に合致していれば、需要と供給とは一致しているのである。マルクスは、この場合の供給と需要の一致を「普通の供給量」＝「普通の需要」としてとらえたのである。

5. 再生産される商品量が「普通の供給量」であり、この商品にたいする需要もまた「普通の需要」であれば需給の「普通」の組み合わせであって、諸商品はその市場価値イコール平均価値で売られるのである。これに反して、需要が不変のもとで再生産される商品量の供給が「普通の供給」より減る場合か、供給量が「普通の供給量」だが需要が「普通の需要」を越える場合は、需給の「異常な組み合わせ」であって、「下位相対的大量」の場合においては最悪の条件のもとで生産される大量の商品の価値が市場価値を規定する——「第二の規定」。同じように、需要が「普通の需要」より減るとか、または供給が「普通の供給」よりも増えたりするならば、「上位相対的大量」の場合には、最良の諸条件のもとで生産される大量商品の価値が市場価値を規制する。このような需給の「異常な組み合わせ」のもとでは、「下位相対的大量」と「上位相対的大量」とのいずれの場合でも、市場価値は、その部面のほぼ平均的な条件のもとで生産されて「その部面の生産物の大量をなしている諸商品の個別的価値と見られるべきである。」

6. 需給の「異常な組み合わせ」のもとでは、「相異なる諸条件のもとで生産される諸分量間の単なる比率からすれば別の結果が生ずるはずにもかかわらず、両極の一方が市場価値を規定する」のである。この場合にはその全商品量

に必然的に含まれている社会的労働時間とその全商品量の市場価値が表現する社会的労働時間が相違する。しかし、この相違を過大視するあまり、両者が近似的に一致していることを看過しがちであったがこれを看過すべきではない。また、この場合には諸商品はほぼ価値どおりに販売（交換）がなされている。そしてまたこの市場価値が表現する社会的必要労働時間は、「別個の意味をもつ」。